狂言装束の構成（第３報）

—女・山伏・出家の装束—

中　野　愼　子

はじめに

本稿では、第２報に続いて女・山伏・出家の装束について報告する。

調査方法

第１報と同じ

女の装束

女の通常の出立ちは縫箔（小袖）を着流し、女帯を締め、ビナン（美男鬘）という白い布を頭に巻き両端を長く垂らして腰のところで挟む。

Ⅰ．縫箔

縫箔は繻子地や綸子地に金・銀箔と色糸で花鳥その他の刺繍をした小袖である。主として、女役が着流しで着る。地味な狂言衣装の中では、華やかな衣装である。

今回実測したものは、綸子の淡紅地に菊・桔梗などの秋草の刺繍が施されたものである。

１．形態と仕立て上がり寸法

形態は、前と後を図１に示した。

仕立て上がり寸法は表１の通りである。（第１報）紅白段熨斗目に比べると、袖幅(4.8㎝）・肩幅（3.8㎝）・後幅（3.8㎝）・前幅（4.7㎝）が大きく仕立てられている。また、前下がり寸法では、紅白段熨斗目では5.7㎝であるが、縫箔では10㎝と前下がりが4.3㎝長い。今回実測の縫箔は平成２年に制作されたものである。

２．裁断

表布は模様合わせが必要であり、裁ち方図は省く。

裏布の裁ち方は、紅白段熨斗目（第１報）図２に準じる。ただし、布幅は４５㎝である。

３．標つけ

標つけの方法は、（第１報）紅白段熨斗目　３図・（第２報）第１報図３の訂正Ｐ85に準じる。

４．縫製方法

（第１報）紅白段熨斗目と同じ方法である。異なるところは、袖つけ下部が人形仕立てで（第２報）Ⅲ．白小袖．４．縫製方法の袖と同じである。また、紅白段熨斗目では、表衿と裏衿は毛抜き合わせに仕立てられていたが、今回の縫箔は裏衿は表衿より衿幅が１㎝控えられている。

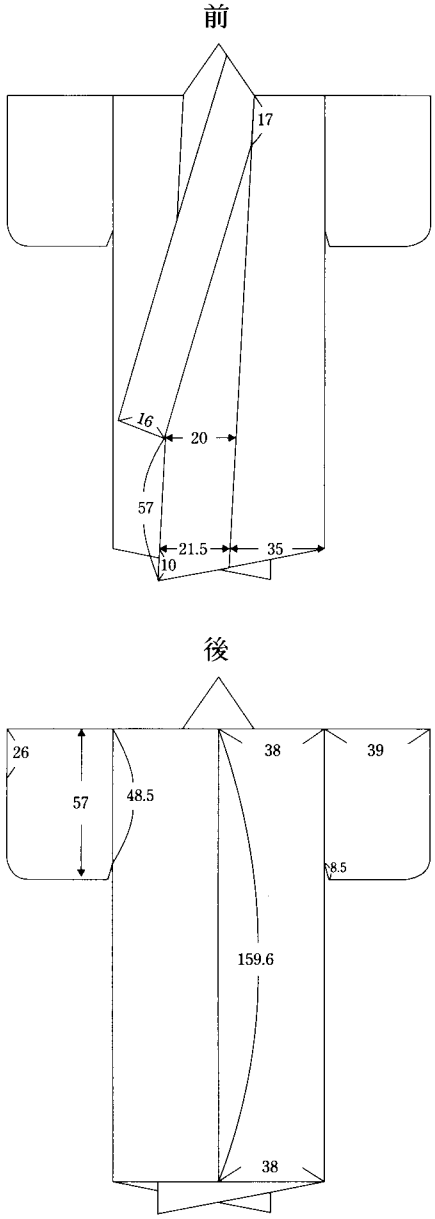


図１　形態

表１.仕立て上がり寸法

名　　称	実測寸法 (cm)	鯨尺換算寸法
袖　　丈	57.0	１尺５寸
袖　　口	26.0	６寸８分
袖　　付	48.5	１尺２寸８分
袖　　幅	39.0	１尺　　３分
袂 丸 み	4.0	１寸１分
人　　形	8.5	２寸２分
身　　丈	159.6	４尺２寸
桁　　丈	77.0	２尺　　３分
衿肩あき	9.0	２寸４分
肩　　幅	38.0	１尺
後　　幅	38.0	１尺
前　　幅	35.0	９寸２分
衽下がり	17.0	４寸５分
衿　　下	57.0	１尺５寸
衽　　幅	21.5	５寸７分
合 褄 幅	20.0	５寸３分
衿　　幅	16.0	４寸２分
前下がり	10.0	２寸６分

Ⅱ．女帯

幅１０㎝～１５㎝の細い角帯で緞子風の生地が多い。縫箔を着流しにし、腰のあたりで前結びに締める。和泉流では娘は後結びに結びたらす。

１．形態と仕立て上がり寸法

形態は角帯と同じ。

仕立て上がり寸法は、幅１０㎝（２寸６分）、長さ４ｍ（１丈５寸３分）であった。

２．標つけ

幅を中表にして二つに折り仮しつけをする。幅・丈の標を図２のように通しべらでしるす。

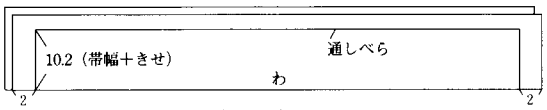


図２　標つけ

３．縫製方法

丈の中央に返し口を20cmあけて、標通りに縫う。角は角から２cmの間で0.2cm斜めに縫い出し、返し口どまりは、縫い代に向かって斜めに縫う。(図３－１)

縫い代を折る（図３－２）

芯を出来上がり幅×２－0.2cmの幅に裁つ。芯の端をきせ山際に合わせ、帯の丈側の縫い代を芯にとじつける。(図３－３)

50cm間隔に芯をややゆるめに、釣り合いをとりながら芯をまち針でとめる。幅の縫い代をきせ山通りに折って、返し口を残し、縫い代と芯をとじつける。(図３－４)

芯がねじれないように注意しながら芯を折り返してとじる。(図３－５)

返し口から表に返し、手でたたいて芯を落ちつかせ返し口をくける。(図３－６)

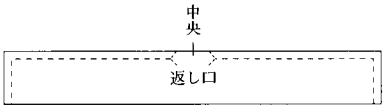


図３―１

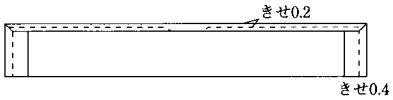


図３―２

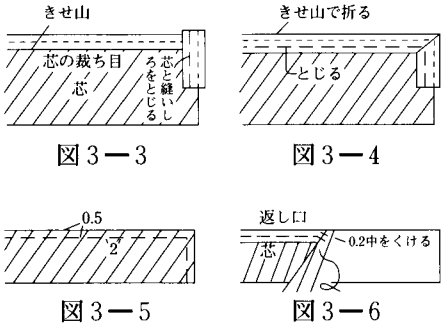


図３―３　図３―４

図３―５　図３―６

図３　縫い方

Ⅲ．ビナン（美男鬘）

白い麻、または木綿布を頭に巻き（巻き方は流派によって異なる）、両端を顔の左右に垂らして帯に挟む。

１．形態と寸法

晒布を縦方向に４つに畳んで用いる。長さは１丈８尺５寸（約７ｍ）。

山伏の装束

山伏は修験道の行者。通常の山伏・修験者（法印）・先達といった身分差があり、着用する装束も異なる。

通常の山伏

通常の山伏は半僧半俗、頭部に兜巾をいただき、着付けとして厚板大格子類を着用する。上着には水衣を着用する。下着は紋尽くし文様の狂言袴を括り袴にする。

Ⅰ．厚板大格子類

1．形態と仕立て上がり寸法、２．裁断、３．標つけ、４．縫製方法については（第１報）大名の装束、Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．狂言袴（括り袴）

狂言袴の裾を括り脚絆をはいた姿を括り袴という。

１．形態と仕立て上がり寸法

形態は（第２報）太郎冠者（従者）の装束、Ⅲ．半袴（狂言袴）と同じである。

仕立て上がり寸法については、表２に示した。（第２報）で実測したものは昭和初期に制作されたものであり、今回実測したものは平成に制作されたものである。計測結果から（第２報）と今回のものを比較し、その差を表２に示した。

表２.仕立て上がり寸法

名　　称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法	第２報との差(cm)
紐　　下	85.0	２尺２寸４分	6
相　　引	38.0	１尺	3
後　　幅	30.0	７寸９分	3
腰　　幅	25.0	６寸６分	2
脇　　幅	11.0	２寸９分	1
前紐付幅	33.0	８寸７分	3
後　紐　幅	3.0	８分	0
後　紐　丈	92.0	２尺４寸２分	１９
前　紐　幅	3.0	８分	0
前　紐　丈	192.0	５尺　５分	３６
腰板幅(上)	17.0	４寸５分	1
腰板幅(下)	25.0	６寸６分	2
腰板の高さ	9.0	２寸４分	1
附菱の幅	9.0	２寸４分	0
附菱の高さ	7.0	１寸８分	0
襠	22.0	５寸８分	－2
胯　下　丈	19.0	５寸	2

Ⅲ．水衣

広袖の単仕立で、丈は膝くらいまでのもの。用いられる布地の織り方には緯糸を縮らせて織ったもので、糸がもつれ合い透けてみえる縷水衣と、太い緯糸を用いた絽水衣の２種類がある。絹や麻布で一色の無地染めが普通である。

１．形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図４に示した。

仕立て上がり寸法は表３に示した。

２．裁断

裁ち方は図５に示した。

３．標つけ

標つけは図６に示した。

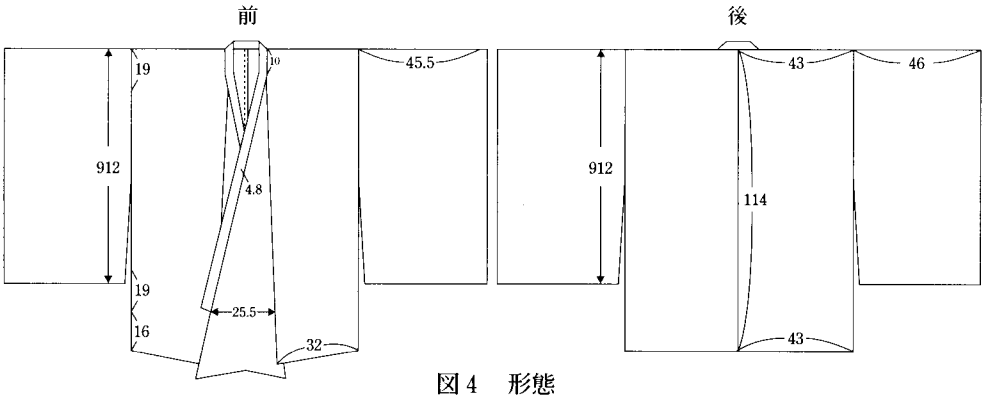


図４　形態

表３.仕立て上がり寸法

名　　称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
袖　　丈	91.2	２尺４寸
袖　　口	91.2	２尺４寸
袖　　付	19.0	５寸
袖　　幅	45.5	１尺２寸
身　　丈	114.0	３尺
桁　　丈	89.0	２尺３寸４分
衿肩あき	9.0	２寸４分
肩　　幅	43.0	１尺１寸３分
後　　幅	43.0	１尺１寸３分
前　　幅	32.5	８寸６分
衽下がり	10.0	２寸６分
衿　　下	15.2	４寸
衽　　幅	26.5	７寸
合 褄 幅	25.5	６寸７分
衿　　幅	4.8	１寸３分
前下がり	10.0	２寸６分

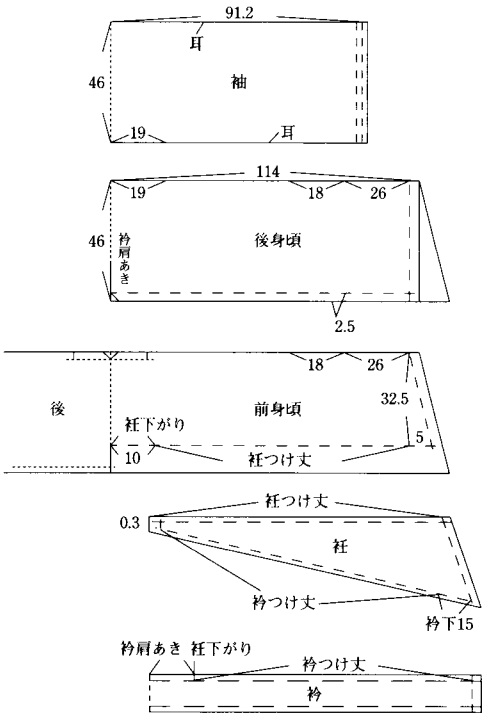


図６　標つけ

袖丈×４＋（後身丈＋前身丈）×２＋衽丈×２＝総丈
９５×４＋（１１８＋１２６）×２＋118×２＝１１０４

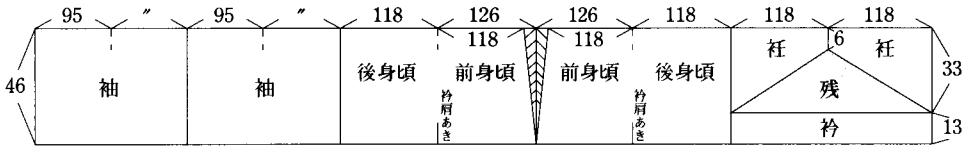


図５　裁ち方

４．縫製方法

単仕立てである。

○袖

袖底は袋縫いにする。袖幅は布幅とし、袖口、振は布の耳を用いる。

○身頃

背縫は標通りに縫い、上下を返し縫いにし、耳際を２重縫いする。0.2cmのきせをかけ左身頃側に倒す。

脇縫は前身頃と後身頃を中表に合わせ、裾から16cm上を、縫い代0.3cmで19cmのみ縫い合わせる。

○衽つけ

衿下を0.8cm幅の三つ折りにして衿下標より３cmほど上まで１cmぐらいの針目でくける。

前身頃の標と衽の標とを中表に合わせて縫う。衽の縫い代で身頃の縫い代を包んで縫い目にまつる。

○裾ぐけ

裾の縫い代を１cm折り、3.5cmの裾折り返し幅で裾ぐけをする。

○衿つけ

身頃の衿つけ標と衿の標を中表にして縫い合わせる。縫い代は衿の方に折り、出来上がり衿幅に折ってくける。この場合衿芯はない。

○袖つけ

身頃袖つけ標と袖を合わせ、0.3cmの縫い代で縫う。袖つけ標の位置で返し留めをする。

修験者（法印）

修験者は頭部に角帽子をつけ、着付けとして無地熨斗目を着流しに着用し、上着には水衣を着用する。

Ⅰ．無地熨斗目

1．形態と仕立て上がり寸法、２．裁断、３．標つけ、４．縫製方法については（第１報）大名装束，Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．水衣

山伏の装束、通常の山伏のⅢ．水衣と同じである。

先達

先達は頭部に兜巾をつけ、着付けとして厚板大格子類を着用し、下着には白大口袴を着け、上着には水衣を着用する。

Ⅰ．厚板大格子類

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第1報）大名装束，Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．白大口袴

前と後は素材が異なっており、前は白平絹を用い、前にだけ襞のある裾口の広い袷袴である。後は生絹で緯糸を大きく引き揃えた堅い畦織である。袷に仕立てられ、芯にござを入れて堅くしてある。

1．形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図示し、測った部位と名称を図7に示した。

前と後を別々に仕立て前後の襠付け、および相引と胯下で前と後がとじ合わされている。

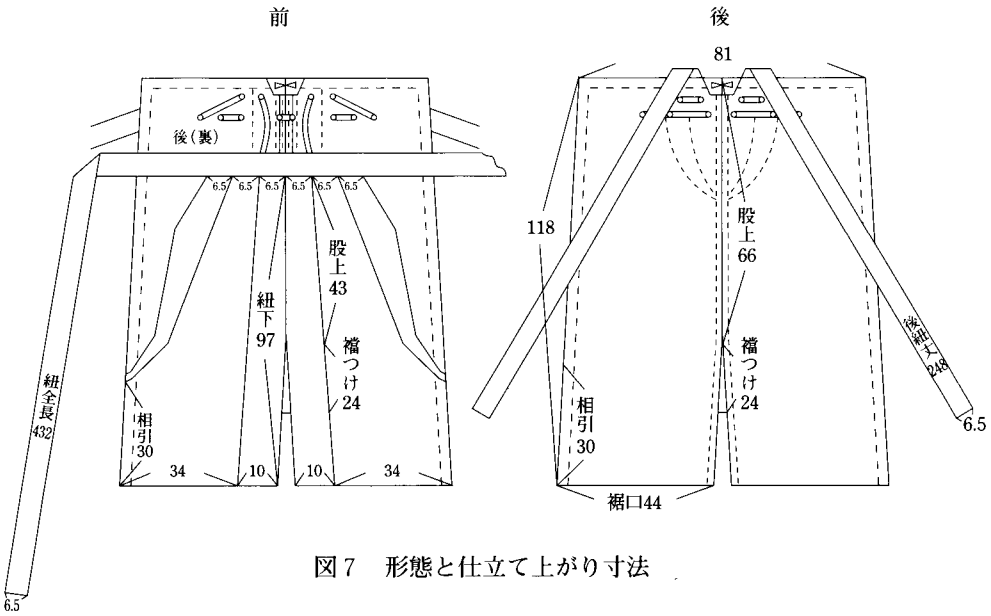


図7　形態と仕立て上がり寸法

2．裁断

裁ち方を図8に示した。

3．標つけ

標つけは図9に示した。

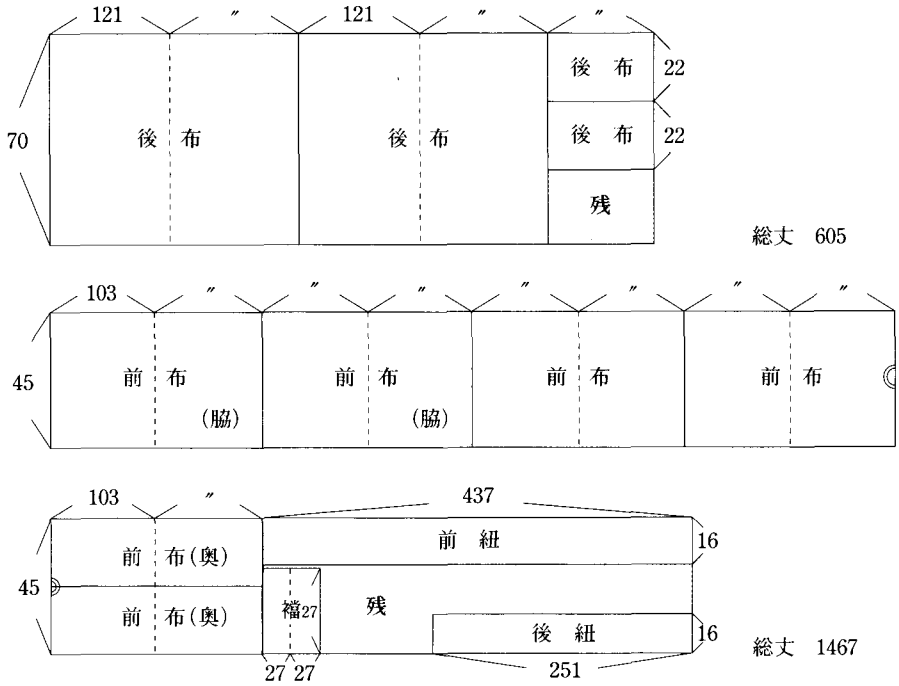

121
〃
121
〃
〃
後 布
22
後 布
22
残
70
後 布
後 布
総丈 605
103
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
45
前 布
(脇)
前 布
(脇)
前 布
前 布
103
〃
437
前 紐
16
前 布(奥)
45
前 布(奥)
襠27
残
後 紐
16
27 27
251
総丈 1467

図８　裁ち方

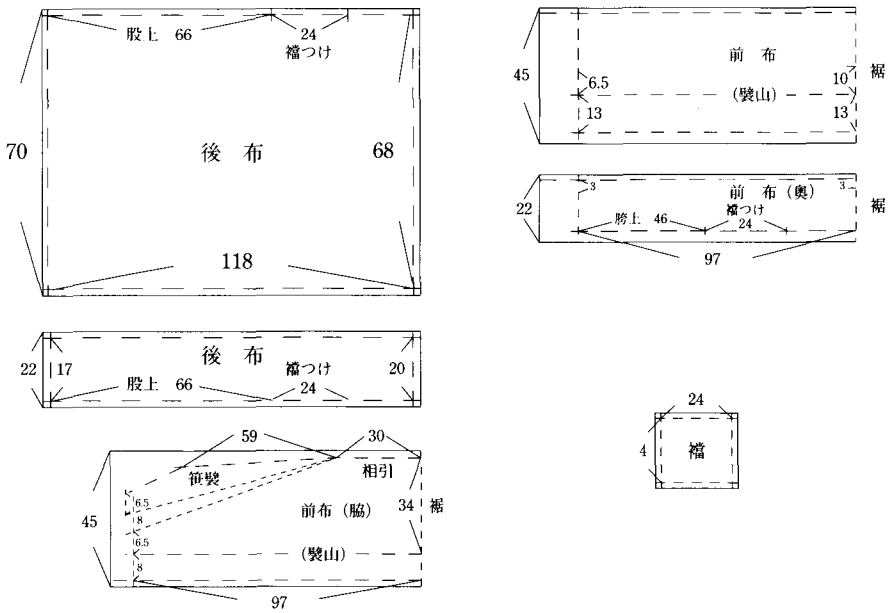

股上 66
24
襠つけ
70
後 布
68
118
45
前 布
6.5
(襞山)
10
裾
13
13
22
3
前 布 (奥)
3
襠つけ
裾
股上 46
24
97
22
17
後 布
襠つけ
20
股上 66
24
24
4
襠
59
30
笹襞
相引
45
6.5
前布 (脇)
34
裾
6.5
(襞山)
97

図９　標つけ

4．縫製方法

○前

表布と裏布を中表に合わせ、脇あきを縫う。裏布を0.2㎝控える。

表布（奥）の表と裏で前布をはさんで四つ縫いをする。

前布の表と裏で前布（脇）をはさんで四つ縫いをし、とじ糸でとじておく。

前胯上は右脚の表裏で左脚の表裏をはさみ四つ縫いをする。

前布（奥）の表裏で襠の表裏をはさみ四つ縫いをする。このとき、襠の四隅は図10のように折って四方をしつけでとじておく。襠の上部の留めは、左前表、右前表、襠の表裏、右前裏、左前裏の順にすくい、左前表へもどして結ぶ。

笹襞は標の0.2㎝内側を一目おとしで縫い、標通りに折って脇側に倒す。

相引き・胯下とも縫い代を裏側に折ってしつけで止めておく。

紐下の位置で図11のように襞をよせ襞山をとじておく。中央の重なりは2.5㎝として、左脚を上にする。

紐は裏側に芯を入れ、紐幅6.5㎝の出来上がり幅に折っておく。紐先は裏から縫い、幅の方向は針目１㎝でくける。紐丈の中央で40㎝ほどくけ残す。

身頃と紐を中表にして紐を縫いつけ、裏側でくける。

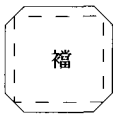


図10　襠角の作り方

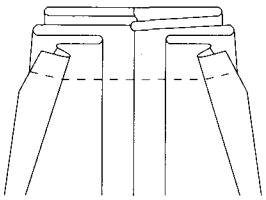


図11　襞の取り方

○後

後布に後布（裏布）を接ぎ合わせ、縫い代を片返しに折る。(図12㋑)

襠を表布と裏布の襠つけ位置にはさみ四つ縫いをし、とじ糸で押さえておく。胯下縫い代は表布裏布とも裏側に折っておく。

表布の後中心を襠つけ位置まで縫い、縫い代を割る。裏布の後中心も襠付け位置まで縫う。この場合、表側から縫い、縫い代は割る。(図12㋺)

ござを右と左に上部から入れ、ござが表布側に入るように縫い代で包む。

上部縫い代は、表布の縫い代で包み裏布を出来上がりに折り合わせ、とじ糸でとじる。左右脇も同じようにとじ糸でとじておく。とじは裏から３㎝間隔で表に約0.5㎝の針目で返しとじがなされている。(図12㋩)

後中心は表からとじを入れる。紐を結ぶと折り襞になる。(図12㋥)

後腰の襞をつくるための紐通し穴をつくり、組紐を通す。

後紐をつくり、(図13) のように紐幅を二つに折り後身をはさんで飾りとじをする。

胯下と相引きは前と後を一緒にとじる。あき止まりや襠つけ止まりには、とじ糸を２回掛け、ほつれ留めにする。

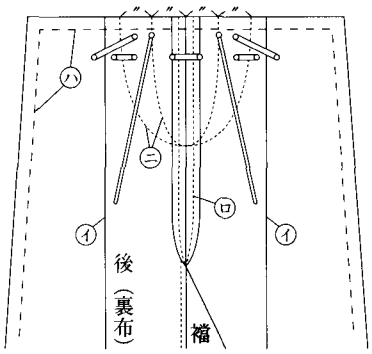


図12　後（裏）の縫い方

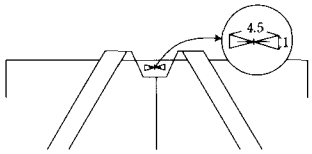


図13　紐つけと飾りとじ

Ⅲ．水衣

山伏の装束、通常の山伏、Ⅲ.水衣と同じである。

出家の装束

出家には寺の住持、旅の僧、新発意（修行中の僧)、座頭、勾当（身分の高い盲人）などの出立ちがある。

住持

Ⅰ．無地熨斗目

1.. 形態と仕立て上がり寸法、２．裁断、３．標つけ、４．縫製方法については（第１報）大名装束、Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．水衣

山伏の装束、通常の山伏、Ⅲ．水衣と同じである。

旅僧

Ⅰ．無地熨斗目

1. 形態と仕立て上がり寸法、２．裁断、３．標つけ、４．縫製方法については（第１報）大名装束、Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．水衣

山伏の装束、通常の山伏、Ⅲ．水衣と同じである。

Ⅲ．狂言袴（括り袴）

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第2報）太郎冠者（従者）の装束、Ⅲ．半袴（狂言袴）と同じである。

新発意

Ⅰ．縞熨斗目

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第2報）太郎冠者（従者）の装束、1．縞熨斗目と同じである。

Ⅱ．編綴（十徳）

羽織の一種で、新発意は太郎冠者の出立ちの上に羽織る。

1．形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図示し、計った部位と名称を図14に示した。

仕立て上がり寸法は、表4の通りである。

2．裁断

裁ち方は図15に示した。

3．標つけ

標つけは図16に示した。

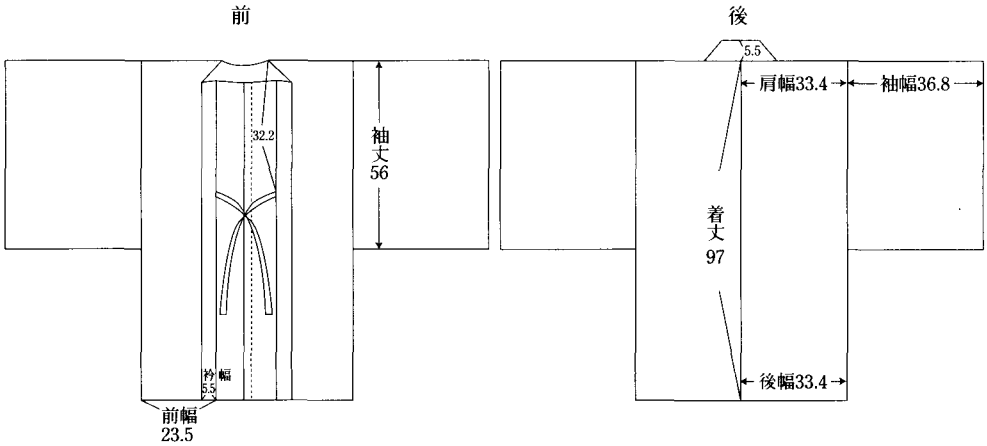


図14　形態

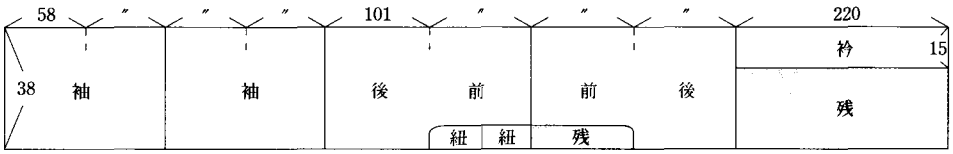


図15　裁ち方

袖丈×４＋（後身丈＋前身丈）×２＋衿丈＝総丈

５８×４＋（１０１＋１０１）×２＋２２０＝８５６

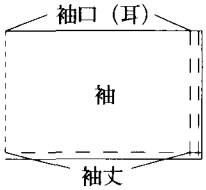
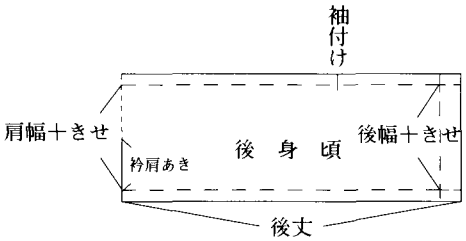
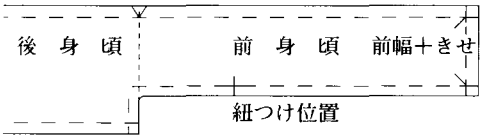


表４.仕立て上がり寸法

名　　称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
袖　　丈	56.0	１尺４寸８分
袖　　口	56.0	１尺４寸８分
袖　　付	56.0	１尺４寸８分
袖　　幅	36.8	９寸７分
身　　丈	97.0	２尺５寸５分
桁　　丈	70.2	１尺８寸４分
衿肩あき	8.5	２寸２分
肩　　幅	33.4	８寸８分
後　　幅	33.4	８寸８分
前　　幅	23.5	６寸２分
衿　　幅	5.5	１寸４分
紐　　幅	2.5	７分
紐　　丈	45.6	１寸２分





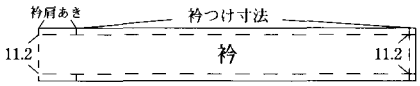


図16　標つけ

４．縫製方法

単仕立てである。

○袖

袖底は袋縫いにする。袖口は耳を用いる。

○身頃

背縫いは標通りに縫い、上下は返し縫いをし、耳際を二重縫いする。0.2cmのきせで左身頃側に倒す。

脇は前身頃と後身頃を中表に合わせ標通りに縫う。0.2cmのきせで前身頃側に倒す。

○裾ぐけ

裾の縫い代を1㎝折り、裾折り返し幅2㎝で裾ぐけをする。

○衿つけ

衿は出来上がり標通りに折る。胸紐の付け位置に紐をつけておき、身頃と衿を中表に合わせて標通りに縫う。0.2㎝のきせをかけ衿側に折り、出来上がり幅に折ってくける。

○袖つけ

身頃と袖を中表に合わせて留めをする。留め方は内袖から針を出し、前身頃、後身頃、外袖の順に出して結ぶ。袖つけまわりを縫い、0.2㎝のきせをかけ縫い代は袖側に倒す。

Ⅲ．狂言袴

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第2報）太郎冠者（従者）の装束、Ⅲ．半袴（狂言袴）と同じである。

座頭

Ⅰ．無地熨斗目

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第1報）大名装束，Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．水衣

山伏の装束、通常の山伏、Ⅲ．水衣と同じである。

Ⅲ．狂言袴（括り袴）

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第2報）太郎冠者（従者）の装束、Ⅲ．半袴（狂言袴）と同じである。

勾当

Ⅰ．無地熨斗目

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第1報）大名装束、Ⅰ．紅白段熨斗目に準じる。

Ⅱ．編綴

出家の装束、新発意、Ⅱ．編綴と同じである。

Ⅲ．長袴

1．形態と仕立て上がり寸法、2．裁断、3．標つけ、4．縫製方法については（第1報）大名装束、ⅡB　長袴と同じである。

おわりに

大和座主宰安東伸元先生のご指導、大和座狂言事務所のご協力を得て、狂言衣装を被服構成の立場から実測調査を行うことができました。ここに厚くお礼を申し上げます。

参考文献

1）古川　久・小林　責・荻原達子：『狂言辞典（事項編)』東京堂出版（Ｓ．５１）
2）増田正造：『狂言の装束』(「染色の美)」１４号）京都書院（Ｓ．５６）
3）栗原　弘・河村まち子：『時代衣装の縫い方ー復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法ー』源流社（Ｓ．５９）
4）切畑　健：『狂言の装束』京都書院（１９９３）
5）油谷光雄：『狂言ハンドブック』三省堂（１９９５）
6）小林保治・森田拾史郎：『能・狂言図典』小学館（１９９９）
7）石崎忠司：『きものの帯』衣生活研究会（Ｓ．50）